
孤立した日々

孤立無援

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤立した日々

【Nコード】

N9985X

【作者名】

孤立無援

【あらすじ】

中学時代を人見知りながら何人かの話す程度の友達とすごし何とかなっていた男。しかし中学を卒業し高校に入学してからは、その生活に変化が加わる。より悪い方向へと。なぜこんなことで俺ばかりこんな目という思いを胸に秘めながら。

入学式の日

なんでこんなことに、花の高校生活を夢見ていた俺はこの状況にどうしようもない抵抗感と恥ずかしさをおぼえていた。胸は高鳴り、周囲の視線に耐え切れ得ない。なんでほかのやつらは、普通にできるんだ。英語の発表なんて。

とある日の人見知りの心情

卒業式・・・それは、感動のとき。

日頃生徒たちを指導していたどんな先生だって泣いたり、笑ったり、反応を起こす。

たとえば、あのアニメや漫画などの二次元でしかみないようなサングラスとなぞの武器を持っているあの先生だって、普段から一切笑わなくて常にクールを決めているめがね先生だって何かしらの反応を示す。

まあ、そのめがね先生はもしかしたら、やっと生徒がいなくあった安堵感かも知れないが、

本当のところは誰もわからない。

けれどこういうときの生徒の反応としての大多数はこれだ。

「ながいなあ。早くおわれよ。」

などさつさとこの生徒からしたらどうでもいい式を終わってもらいたくてうずうずしていたりする。

俺はこの大多数に属していた。けれどこのあと高校に入ってから起る生活をもっと自分が知っていたなら、絶対にこの最後の中学時代を満喫しただろう。

入学式の日

これから、俺が入学する高校は、新しくできた学校で電車で30分もかからない。さらに乗り換え一回のみという好条件なのだ。しかし、激しく人見知りをする俺は電車の中でケータイで常にナビを使い、道に迷わないよう何度も何度も見直し、学校にむかっていた。

幸い駅についてからは、自分と同じ、紺色のブレザーを着た同い年くらいのやつらが固まってあるいていた。これで迷子にはならないとやっと安心し、ケータイをしまうことに成功した。

駅から歩いて十五分も歩かないうちに、校舎についた。

校舎は8月から新校舎ができるらしいが、やはり古い。

この校舎の前で少しこの最後の姿をここに刻みつけようと思う。

途中でクラス表を配っている先生らしいおばちゃんからクラス表をもらえ、自分の名前を探すと、見つけた。

「伊藤 守」出席番号は二番、七組か、なんか運がよさそうなクラスだ。

高校にはいつてから何かいい感じだなあと思いながら、七組へ向い、どうやら4階らしい教室に向かった。

教室にはいると、新しいクラスメート全員の目が俺に向いた。怖い。これは、教室を間違えたのかもしれない。そうおmoi、一度教室を出て、もう一度クラスを確認すると、1-7そうかいてあった。

とりあえずこのクラスに入る人がいたら、一緒に入ろうと思いだアの前で待ち新たなクラスメートとともに教室に入った。

教室に入って5分くらい待っていると、先生が入ってきた。しかもこの間クラスメートたちは、完全に無言だった。その空気を打ち破

るかのごとく、先生は大声をだした。

「私は、あなたたちの担任になりました。鳥居ともみです！」

このやけに大きな声に驚き、俺たちは完全に新たな担任に目を奪われた。

俺は熱血系かこういうタイプがいちばんいやなんだよなあ。こころのそこからためいきをつかずに入れなかった。そこから鳥居による熱血的な挨拶は続き、やっと入学式のため、体育館に移動することになった。そのとき、出席番号一番相沢智樹の靴を踏んでしまった。

彼の顔はやけに迫力があり、地元にヤンキーやら不良がいなかった俺はすぐに謝ろうとしたが、彼は舌打ちをして、前を歩いていった。そのあとの入学式など頭に入らず、ただ相沢から逃げよう。そう思い俺は家にすぐに帰ることに成功した。

その日は一時間でそのことを忘れ、TVを見て笑っていた。

新生活が…

新生活が…

入学式が終わった次の日、少し不安になりながら俺は駅で迷わないようにしていた。

とりあえずこの学校は生徒数がやけに多いらしく、俺が乗る駅からもうすでに同じ制服を着たやつがいた。

やつのあとをつければいい。

そう思った俺はやつの後をつけることにした。

しばらくやつのおあとをつけていると

もうすでに学校開始の八時三十分に近づいていることに気がついた。

俺はやつを見捨て学校へむかうことにした。

しばらく走っているとギリギリの時間にたどり着き一息つき、あたりを見渡したらおかしなことに気がついた。

周りのやつらがすでにグループができています！

なぜだ！という疑問が全身を駆け巡りまわりの会話を聞いてみると

「昨日のカラオケおもしろかったよね」

「マジ相沢ナイスだわ」

などという会話が聞こえてくる…

あのヤロウよくも俺を呼ばなかったな。

心の中で毒づくのと相沢のヤロウが俺に話しかけてきやがった。

「どうして伊藤くんはこなかったんだ？」

相沢は迫力のある笑顔をみして笑いかけてきた。
なぜって…俺はお前が怖くて逃げていたというのに。

というかその恐ろしい顔で伊藤くんとかよぶんじゃねえ。と思った
が、

人見知りが言葉に出せるわけがなく、

「ちよつと、家の用事があつて・・・」

とちいさな声で言うことしかできなかった。

その後あいつは俺をどうでもよさそうにその笑顔を俺から周りのクラスメートに仲よさそうに向け、楽器？の話をし始めた。

ここで相沢は俺を孤立させるつもりなのだと思った。

アイツは俺をいまだにあの程度のことをうらみに思っているようだ。

けれどそのしつこい性格を周りにいる級友たちにみせることなく、
その顔とは逆にいい人キャラを作っているようだ。

しかも俺の周りにいる級友たちは全員ヤツに取り込まれているような気がする。

新たな新生活は不安が残った。

俺には同じ中学の友達すらこの学校にはいないというのに…

このまま俺が孤立するのに時間はかからなかった。

スリーパーになった日

スリーパーになった日

四月には様々な変化が誰にしろあると思う。

学生ならばクラス換え。

そのとき仲のいい人がいないと嘆く人もいるかもしれないし、逆に新たな関係というものに希望を見出す人もいるかもしれない。

社会人ならば入社式。

2年目の社員はやつと自分にも後輩ができると喜ぶかもしれないし、自分が追い抜かれるとあせる人もいるかもしれない。

というように四月は様々な変化を人間にもたらす。

俺の場合は悪い変化だった。

健康診断のときはひどかった。

俺だけクラスメートとともにやらなかった。

このときこそはと孤立していそうなヤツに接触しようと思ったのに、けれど俺よりも孤立しそうな顔をしていたヤツは前の席のヤツとやっていた。

俺の前の席の相沢は他のやつらと十人くらいでやっていた。でもこの日はまだ精神的に余裕があった。

五月までには話すやつくらいできるぞ。
それくらいの余裕はあった。

けれど次の日からがきつかった。

初めての授業が始まり、
まず自己紹介から入った。
相沢の自己紹介が終わり俺の番になった。

緊張していた。

俺の目にはもう相沢の住処としか思えないし、
クラスメートたちは、相沢にしか見えなくなっていた。

「伊藤守です。すきなものは特にありません。
よろしくお願いします」

なぜかこの後笑いが起こった。
意味がわからない。
何もおかしいことはしていないはずなのに。

その後次のヤツが、自己紹介していたがまったく耳に入らなくなっ
ていた。
いつの間にか授業が終わっていた。

今日は自己紹介しかないのか。
そう思い、時間をつぶすためトイレに行こうとすると
名も知らないクラスメートの声が聞こえてきた。

「伊藤って根暗っぽいよな」

「ってかなんで新しいクラスにあんな面白くもなさそうなやつがいるんだよ」

など陰口が聞こえてきた気がした。

何とかなるさ。

人見知りの割りに無駄にポジティブに考えたと自分でも思うが、そう思わなければやっていけないような気がした。

そのとき俺は誰もいないトイレで三回目の手洗いを迎えていた。

昼休み

昨日俺は同じ状況に陥った同士がいないがいるかいないかをパソコンを使って調べていた。

そしたら、割といっぱいいることがわかり、

藁にもすがる思いで、明日からどうやってすごせばいいのか。

どうやれば友達ができるのかを検索してみた。

結果がこれだ。

・俺のような状況になっているヤツを一人ぼっちからボツチということ。

・学校中を歩いて過ごす

「ウォークマン」

・自分の席で飯を食い、食い終わったらすばやく寝たふりをはじめ
「スリーパー」

・自分の席で飯を食べられない理由があり、便所で食う
「便所飯男」

という風に分けられるようだ。

細かく分ければ飯を素早く食べて図書室やら屋上やらに単体に行く
「不良もどき」

というものもいるらしい。

ここですこし疑問が残った。

ウォークマンはもし女でもウォークマンなんだろうか。

便所飯男はもし女でも便所飯男なんだろうか。

というどうでもいい疑問を考えていた。

少し迷った挙句

俺はこの中から一番無難そうな

「スリーパー」になることにした。

ウォークマンと便所飯男は悲しすぎる。

そんなの俺のプライドが許さない。

たとえなにがあろうとも便所飯男にだけはなりたくない。
心にそう誓った。

くんとさん

くんとさん

学校が始まって大体一週間がたった。

その間常に無言だった俺は、1 - 7 教室の大体のことがわかった。

まず実は相沢はそこまで自分の輪を広げていないこと

この教室のトップは「木村拓也」と「多田公平」という男ということ。

この二人はおなじ中学ではないらしいが、やけに絡んでいることがわかった。

あと女子は基本静かで男子のテンションが異常であること。

などがこの一週間観察した結果わかった。

そのことを俺は事細かにまとめ、

どうしたら相沢の魔の手がかからないやつと友人になれるのか。

そのことだけを考えていた。

しかし木村。

俺はお前にだけは言いたい。

その顔でよくその名前を名乗れたな。と

というか、このクラスの異常なテンションは何だろう。

授業中は話していないヤツがない。

誰かが授業中に当たると異様に盛り上がる。
ただし俺のときだけはやけに静かになる。

何なんだろう。これ。

ただ単に俺がなじめていないだけだろうか。

あとなじめないのが名前の後にくん、さん、などの敬称をつけていること。

いったいこれは何だろう。

しかもなぜか人をくんをつけて呼ぶのには抵抗がある。

俺が体験した中でこんなことはなかった。

この間なんて、トイレで時間つぶそうと思いそのまま向かったら、
よそのクラスの女子に話しかけられた。

「多田くんを呼んでくれない？」

こんなこといわれたら、よびにいかなちゃいけない感じじゃないか。
だから俺はちゃんと聞こえるように言った。

「う、うん。わかったよ。」

最近しゃべらなかつたからか、どもってしまった。

俺は気持ち悪いと思われないかとビクビクしてしまった。

ていうか、俺はこのときまだ多田くんってだれだと思った。

だから少し緊張しながら近くにいたクラスメートに聞いたんだ。

「多田さんっています？」

けどそいつはそいつは怪訝な顔をして

「多田さん？くんでしょ？」

いやそこはどうでもいいんだけど。

もう一回言ってみた。少し大きな声で。

「多田さんっています？」

こんな感じのループが続き、最終的には、

なぜかもう人としやべりたくない気分になってしまい、
とりあえず探していた女子に、

「たぶん、いないっぽい」

と試みてみた。（この間かった時間は約6分）

しかもこのときはなしたクラスメートがクラスのトップのひとり。

木村拓也だった。

これからは彼のことを好きになれそうにない。

というか相沢以上に彼のことを嫌いになった気がする。

せつかく勇気を振り絞って、聞いたのに・・・

なんだよ。

「さんじゃないでしょ。くんでしょ」って

この言葉を聴いた瞬間、俺はこいつは性格もめんどくさいヤツなんだと

確信した。

だから某アイドルがかわいそうに思えて、
偽者とこころの中で言っ
てあの人との差別化を図ることにした。

クラブそして発見

クラブそして発見

クラブ選択は人生を左右する重大な決定のひとつだと思う。

この選択によっては、自分の仲良くなる人々も変わるし、逆に嫌われる危険性がある。

それにそのクラブ活動によってはそれが生涯の趣味になる人も多いと聞く。

けれどクラブ選択というものは、

ある程度の社交性があり、

ある程度の自信があり、

ある程度の度胸のある人しかできないと思う。

俺は、そのどれにも当てはまらない。

けれどさすがに高校生になったんだし、入部してみようか。

なんて簡単に考えたけれど、

このクラスでは入部しないヤツが多いようだ。

入部するヤツでもなぜかテニス部に固まっている。

それに周りの声を聞いていると、

どうやら、入部すると金がかかるようだ。

これはダメだ。

俺にそんな金はない。

こんなときあのどれかを持っているヤツなら、

バイトしてでもやるんだろうけど、

俺は違う。

というか人見知りにできるわけがない。

という結論になり、中学時代と同じ帰宅部に入部することにした。

これはある意味エリートなのかもしれない。

中学時代からずっと帰宅部という部活に専念しているのだから。

せっかくの決意を無駄にしたことをポジティブに考えてみた。

ここ最近、無駄にポジティブに考えることが多い。

入学式から約二週間、

俺は授業の受け答えのみしかしゃべった記憶がない。

なぜこんなにこの教室は、俺につめたいのдарう。

俺は確かに、あまりしゃべらないし、

昼休みもずっとスリーパー続けている人間だけださあ。

少しは優しくしてくれよ。

教室を見渡しながらそう思っていると、

なにやら孤立しているっぽいヤツがいる。

誰だかわからないが、女子のようだ。

少し肌の色が黒く、目が大きく、顔というか全体が小さい。

なんというか、小猿のような女子だと思った。

その見た目に反して、あまりしゃべらないため浮いているようだ。

彼女を観察した後安堵感を感じた。

よかった。俺一人が孤立しているわけではない。

仲間がいる。仲間がいるんだ。

これがまだ希望になる。

接触

接触

これは彼女と友人になるしかない。
そう確信した。

けれど俺は小学生のとき以来、
女子と話したことがない。

女子というものと話す話題がないのだ。

それに男子とすら話すのに緊張するというのに、
女子と話すというのはハードルが高すぎる。

何なんだろう。この緊張感。

小学生のときは普通に話せたのだけれど。
中学生になったときの女子との壁あれが悪かったのか。

中学生になったら、

わかるだろう。

あのなんともいえない空気。
まるで女子とは男子は話してはならない。

そう決まっているような空気。

俺はあれに負けたのだ。

あの空気で話せる猛者ではない。

どうしよう。悩んだ挙句、とりあえず、彼女のことを調べよう。そう思った。

寝た振りしつつ、人の話を盗み聞くという裏技。

これは一度でもこの状況に陥った人は行うと思う裏技だと思う。

これを利用して、俺は周りの会話を聞いた。

・・・どうしよう、まったく彼女の話題が出てこない。

しかも、いつの間にか、彼女がどこかに行っている。

それでどこに行ったのか探し始めたときだった。

俺は紙を見つけた。

それは座席表。

これで、彼女の名前がわかる。

なんでもないように。自然に。そう自然に。

その座席表を見てみた。

彼女の席は左から四番目、前から四番目の席。

名前は・・・栗原かすみか。

とりあえず、今日一日考えて話題が見つかったら話しかけよう。

そう決意して、俺は図書室に向かった。

この教室に居場所がない。

こんなところにいたら、寂しすぎて死んでしまいそうだ。

図書室は、三階の一番奥にある。

階段をくだり、図書室に向かった。

図書室にはいると、まず最初にある机。

そこに、栗原さんがいた。

どうやら彼女しかないようだ。

彼女は俺に気づいて、話しかけてきた。

「伊藤くん。同じクラスだね。初めて話すね」

彼女から離しかけてきたことに驚いた。

とりあえず返事をする事ができた。

「そうだけど。なにかよう?」

このとき俺は後悔した。

どんだけそっけない男なんだと。

もう少しやわらかい反応はできないのか。

何でこんなときだけもらないで普通に話せるのだ。

そう思い悩んでいると、

彼女は俺が迷惑そうにしていると思ったのだろうか。

彼女は困った顔をしてこういった。

「あ、ごめん。忙しそうだもんね」

そういつて、彼女は図書室を出て行った。

これは、彼女からのアクションなんだろうか。

彼女も友人というものが欲しかった。

同じクラスでかつ孤立している人間なら友人になりやすい。

彼女もその結論に達したのかもしれない。

それで俺に話しかけてきた。

孤立していることからあまり話すのが得意ではないのだろう。

それでもその勇気を振り絞り話しかけてきた。

けれどその勇気をたった一言でつぶしてしまった。

俺にとっても重要なチャンス。

彼女はよほど重要な用件がなければもう俺とは話さないだろう。

けれど俺から話しかければまだチャンスはあるだろう。

そう思い直し、図書室に来たというのに、

何も読まずに教室に戻った。

事件発生

事件発生

チャンスを作る。

そう決心して、図書室を出た俺。

しかし、周りには誰一人としていない。

彼女はどこに行ったのか。

これを考えること。それが今の課題といえるだろう。

けれど少し思っていたことがある。

もし話しかけるにしろなんていえばいいのだろう。

さっきの態度について謝るべきか？

けど謝るにしろどうすればいいんだよ。

もし謝るにしたって、重要な場面で何かしでかすに違いない。
そう思った。

他に何か伝える方法はないのか。

このときあることに気がついた。

何かに書いて渡せばいい。

これの問題点は、これを渡すとラブレターだと思われなかだ。

それに俺は別にく栗原かすみくのことは好きではない。

そうすることで、せつかくできるかもしれない友達をなくすかもしれない。

けれどこのまま悩んでいたって何も解決しない。

とりあえず、教室に戻って書いてみよう。

そう思い、教室に向かった。

教室の席に座り、レポート用紙に彼女への謝罪文を書いていた。

これでやっと終わった。

その手紙を蛍光灯に透かしてみると、

黒い影が現れ、その紙を取っていつてしまった。

このことに驚き、すぐにとろうとしたとき事件に気づいた。

さっきの黒い影は木村拓也（偽者）の腕だったのだ。

おとなしいイメージがあつた女子が彼につかみかかり、

いきなりつかみかかれて驚いてた彼の隙をつき、

彼を掃除用具入れに入れたのだ。

そのときの腕が紙にあたり、落ちたようだ。

なぜ女子がそんなことをしたのかわからなかった。

周りの会話を聞いてみると、

どうやら偽者がその女子の机の近くにいて、
机を揺らし続けていたようだ。

俺はクラスの女子はおとなしいという印象から、

怒ったら怖い。鬼のような性格の集まりなのだと思った。

まあみんなそうとは限らないけど、

もしかしたら栗原さんもそうなのだろうか。

確かにキレたら怖そうな顔をしている。

俺が渡した瞬間キレたりしないだろうか。

少し想像してみることにした。

そう彼女は手紙を渡した瞬間、馬鹿にした顔をしてこっているのだ。

「なんでワタシにこんなもん渡すのよ！」

あんたみたいのがワタシにつりあうわけないでしょう！
一回自分の顔を整形してからきなさい。この不細工！」

わりと想像できて本当になりそうだなと思った。

それに俺は別にあんたなんかと付き合いたくはない！

そう自分の想像に突っ込んでしまった。

渡すかどうか迷っていると、

彼女がゆっくりクラスに入ってきたのを見た。

やっぱり少し不機嫌そうな気がする。

このままでは手紙が渡せない。

勘違いされた日には俺がキレそうな気がする。

どうしよう。

とりあえず後は帰りのHRしかない。

もう全部明日の俺に任せて、今日はいつもどおり帰ろう。

少し諦めが入り始めていた。

傍観者計画

傍観者計画

昨日考えたことを思い出そう。

？現状をこのまま維持する。

？栗原さんか誰かが行動を起こす。

？これを俺が細かく観察する。

？栗原さんの性格もわかるし、クラスの様子もわかる。

？
一石二鳥！

題して、「傍観者計画」！

フローチャート式にするとわかりやすい。

この作戦を思いつき、明日からは辺りを細かく観察していこう。

そう決心し、昨日は布団の中でぐっすりと寝た。

そうしていつもどおりに起きた。

そんな日だった。

いつもどおりのんびり起き、

いつもどおり学校が始まる5分前につくようにゆっくりと歩き、

学校に着いた。いつもどおりの登校風景。

まへの生徒の背中を見ていると、何かを忘れているような気がする。

何だろう。と少し首をかしげていると、

肩が少し軽い。なぜだろう。

いつもどおりではないことが起こっていることに気がついた。

・・・かばんを忘れてしまったようだ。

今日は授業が山ほどあるというのに。

このままだと先生たちの間で作り上げてきた優等生のイメージが消えてしまう。

俺は授業中常は無口だし、いつも寝ないで授業を受けていたという

のに、

今日そのイメージが消えてしまうのか。

もしこのイメージが消えてしまったら何が残る。

俺に残るのは、ただの人見知りで、ボツチな男。

それしか残らない。

これだけは絶対に回避しなければ、

とりあえず俺に今必要なのは、

・シャープペン（できれば芯が二本以上入っているといい）

・消しゴム

・紙（最低六枚）

この三種の神器が必要だ。

最悪消しゴムはなくてもかまわないが、他は必要だ。

しかし俺に物を貸してくれるような友達はいない。

俺は教室について、席について悩んでいた。

俺の前を誰かが通り過ぎた。

栗原さんだ。

いつもどおり陽気そうな顔をして一人席に着いた。

彼女を見て、頭に思い浮かんだことがある。

「傍観者計画」

つい声に出してしまった。少し恥ずかしい。

まあ俺に興味のあるヤツがいないから大丈夫だが。

自分のことながら悲しくなる。

けれどいくらなんでもそんなヤツから言われたとしても、

物は貸してくれるだろう。

そう思い、後ろのやつに頼んでみた。

彼は優しい顔立ちをしていたから話しかけやすそうだったからだ。

「ねえ、俺さあ、筆箱とノート忘れちゃって、貸してくれない？」

とりあえずは聞こえたようだ。

「あ、うん。いいよ。ちょっとまって。」

後ろの彼はいい人のように。少しもいやそうな声を出していない。

けれど最近になって学んだ。

こういつやつらほどキレると怖い。

彼とはあまり交流を深めないようにしよう。

そう思いながら、ありがたく借りた。

これでやっと俺の評価は下がらず、さらには「傍観者計画」が実行できる。

この幸運に笑わずにはいられなかった。

体育祭の計画

体育祭の計画

それは、五月のことだった。

「傍観者計画」

それを始めて約一ヶ月が過ぎたころ。

窓からは霧雨が見え、そろそろ梅雨が始まる。

梅雨になると憂鬱になるという。

けれど俺は逆に梅雨になると少し元気になる気がする。

この季節は気温、湿度、雨量どれをとっても一番の季節だと思う。

雨のぼつりぼつりという音。その後の雨のハーモニー。

雨によって色っぽく見える木々。

梅雨は様々な方面で楽しめる。

その日の俺は少し活動的になっていた。

水溜りを見ると鼻歌を歌いながら、スキップをするくらいに。

すこし行動を起こしてみることにした。

もうそろそろ行動を起こすか。一ヶ月も様子を見た。

この機会を逃せばこれから先、二度とすることはないだろう。

今日は体育祭。普通の学校はどうかは知らないが、この学校は5月に始める。

人間というのは極限状態に陥るとなにかしらの本音を出す。

ここから本当のことをひきだそう。

栗原さんの正体を。

.....

彼女の正体を見極めるため、この日のためにとある仕掛けをした。
た。

彼女がいじめにあつたらどうするか？

これを人為的に起こしてみた。

よくTVとかで見るような女友達の男を取ったみたいないじめではない。

少しずつ少しずつ、いじめられる様な要因を作ってみた。

彼女のノートや教科書を捨ててみた。

そしたらカバンの中を見て驚いていた。

どこかに忘れたのかと思ったのか。

教室移動した場所まで探しに行ってみたんだ。

けれど残念。もうゴミ箱の中だ。

そのあと彼女は毎回隣の人に見せてもらっていた。

最初のほうは特に何も思っていなかったようだけど、

途中からとてもウザそうにしていた。

次に彼女の悪評を流してみた。

いくら孤立しているといっても、多少は話す機会がある。

少し雑談をしてから、彼女の悪い噂を流してみた。

さすがに信憑性のないものは流せないが、

本当にありそうなことを流してみた。

例えば、彼女はいじめられているみたいだ。

そういうだけで普通の人は距離を置く。

この後はこのうわさは大体の人に広まる。

これだけでいじめられる人はできる。

クラスの何人かはいじめっ子というものは必ずいる。

いじめられているやつなら男だろうが女だろうが容赦はしない。

そういうやつらだ。

このうわさが流れ始めて大体2週間が過ぎたころだ。

周りは様子見の段階だったのだろう。

例の事件以来、ストレスがたまっていたのだろう木村（偽）が行動を起こした。

「栗原さんなんでこっちみんの？」

これが俗に言うなにガンつけてんだ！こら！を丁寧にいつてみたよ
うだ。

やはり最初はさすがに女子にはまずいという思いがあったのだろう
か。

栗原さんはこれに首をかしげながら返し、

「えっと、ぜんぜん見てないけど」

これはこれで冷たく聞こえる言葉だ。

それで少し機嫌を悪くしたのか木村（偽）は不機嫌そうにしていた。その後ヤツはいうことがなくなったのだろう。他のやつと話し始めた。

彼女はこれでクラスのトップに悪印象を持たれた。

木村（偽）は彼女をシカトするようクラスメートたちに言っていた。あまり交流のない俺にまで行ってきたのだから、本気なのだろう。

もともと一応クラスのトップに逆らうような勇気のあるヤツはいない。

彼女は必然的にクラスメート全員からシカトされる軽いいじめっ子となった。

これで、体育祭のときにどういった反応を取るか本音が出るはずだ・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9985x/>

孤立した日々

2011年11月11日05時14分発行